第三十九回 台東薪能

平成三十年九月四日（火）午後五時四十五分開演
於・金龍山浅草寺境内（雨天時　浅草公会堂）

演目の解説　児玉　信（能楽評論家）
〈火入れ式〉　木遣り・まとい　新門鳶頭連中

番組

能

隅田川

子方　坂　瞳子
シテ　観世　喜正
ワキ　森　常好
ワキツレ　森　常太郎
大鼓　柿原　弘和
小鼓　鵜澤洋太郎
笛　一噌　隆之
後見　坂　真太郎
駒瀬　直也
地謡　中森健之介　遠藤　喜久
小島　英明　中所　宜夫
永島　充　弘田　裕一
鈴木　啓吾　奥川　恒治

狂言

棒縛

シテ　山本泰太郎
アド　山本凜太郎
アド　山本　則孝

〈休　憩〉

能

鵺

白頭

シテ　坂　真太郎
ワキ　舘田　善博
間　若松　隆
大鼓　柿原　弘和
小鼓　鵜澤洋太郎
笛　一噌　隆之
後見　奥川　恒治
弘田　裕一
地謡　菅野　貞男　鈴木　啓吾
桑田　貴志　中所　宜夫
佐久間二郎　駒瀬　直也
永島　充　遠藤　喜久

終演予定　午後八時五十五分

附祝言

演目のあらすじ　能楽評論家　児玉　信

能『隅田川（すみだがわ）』

京都の吉田某の一子梅若丸は、人買いにさらわれて奥羽に下る途中、武蔵・下総国の境を流れる隅田川のほとりで力尽きて亡くなった。少年の境遇を哀れに思った村人たちが塚を築いて弔った――。

こんな伝説に基づく物語です。いとし子恋しさに狂気して都を出た母が、行方を尋ねて遥々隅田川のほとりにやってきます。その母を待っていたのは無残な現実。

母と子の悲しみが胸を打ちます。

狂言『棒縛（ぼうしばり）』

留守をすると、盗み酒をする召使の太郎冠者・次郎冠者。目に余るので業を煮やした主人は、ある日一計を案じます。

まず太郎冠者を呼び出して、次郎冠者を縛る対策を相談。近頃稽古している棒術の技を披露させ、隙をみて両手を棒に括りつけます。あっけに取られる次郎冠者をみて大笑いする太郎冠者も主人は後ろ手に縛りあげ、これで大丈夫と出掛けて行きます。

盗み酒防止に縛られたと思えば悔しい。残された二人が編み出した妙案は？

能『鵺（ぬえ）　白頭（しらがしら）』

ヌエは日本で伝承される妖怪です。夜に鳴く鳥とされました。現在ではトラツグミと理解されますが、寂しげで不気味な鳴き声が平安貴族たちには不吉なものに聞こえたといいます。

能『鵺』は、夜な夜な天皇を悩まし給うた鵺が源頼政の弓で退治され、死骸はうつほ舟で芦屋に流されたという伝承に基づく物語です。

ここでは頭は猿、尾は蛇、手足は虎で、気味の悪い声で鳴く物の怪と描写されています。白い頭髪姿の正体を顕し、自分が頼政に退治された様子を語り聞かせます。